

10月のピックアップコーナー

『フランス』

竹本 瞳

明治の文豪永井荷風が「仏蘭西に行きたしと思へどフランスはあまりに遠き…」と書いていますが、荷風が渡仏した1908年頃は、フランスに行くには船で何日もかかりました。今では、関西国際空港からパリまで直行便で約12時間。その日の内に、気持ちの準備も出来ないままにパリに着いてしまいます。

フランスの歴史をたどれば、西フランク王国の成立(843年)に始まりヴァロア朝、ブルボン朝、フランス革命(1789年)を経て現在第5共和制となっています。また1993年11月マースリヒト条約により発足した欧州連合(EU)創立のメンバーの一国であり、通貨もナポレオン時代から使用されていたフランはヨーロッパ通貨統合への参加によって、2002年に完全にユーロに切り替わりました。現代フランスは、EUの議長国を勤めています。

日本とフランスの関係は、イギリス・オランダとは異なり第二次世界大戦において直接に戦争しなかったために親交は深く続いています。

しかし、日本ではフランスはファッション、美術、料理、サッカー等、外面的な文化で良く知られている反面、内面的な心の文化についてはまだあまり詳しく知られていないように思われます。

今年は、日仏交流150年目に当たります。日仏両国でその記念行事が沢山おこなわれています。1958年、パリ市と京都市は両国において友情盟約締結が承認され、姉妹都市となっています。京都でもこれに関係する行事が行われており、9月中旬にはパリ市副市長が京都市を訪れ京都市民との交流会がおこなわれました。

外大図書館でも11月29日(土)から12月5日(金)まで国際交流会館6階で日仏交流150年を記念して稀観書展示会を開催する予定です。書物で日仏交流の歴史の流れを観に来てください。

たけもと ひとみ(司書・課長補佐・情報サービス課)

本誌の表紙に使われた貴重書

The history of Japan, 2 vols. London, 1727-28

エンゲルベルト・ケンペル 『日本誌』

KÄMPFER, Engelbert



エンゲルベルト・ケンペル(1651 - 1716)は、ドイツ生まれの医者、博物学者です。ドイツのレムゴーで生まれ、1667年ハーメルンの小学校に入学しましたが、翌年にはオランダのリューネブルクの学校に移り、次いでリューベックの学校に転校して歴史、語学、音楽等を熱心に学びました。ダンチヒ、クラカウ、ケーニヒスベルク、ウプサラの各大学で学び、クラカウ大学で学位を取得。1683年スウェーデン使節団に従ってロシアに渡り、その後ペルシャに2年滞在し、ペルセポリス遺跡を訪れたりしてペルシャ誌を執筆。1689年オランダ東インド会社に就職し、1690年に長崎出島オランダ商館付の医師として来日。1691年と1692年の2回に渡る商館長の江戸参府に随行しました。滞在2年の後、バタヴィア経由でオランダに帰り、1694年ライデン大学で医学博士の学位を取得。郷里レムゴーで開業のかたわらノートを整理して1712年に『廻国奇観』を出版しました。

1716年に65歳で死去しましたが、『日本誌』の遺稿はイギリスのハンス・スローン卿の求めにより、原文のドイツ語版が出版される前にロンドンの医師会会員であるジョイッツェルによって英語に翻訳され、1727-28年に出版されました。本書はその初版本で、全5篇15章及び付録で構成されています。第1篇ではバタヴィアからシャムへの旅行、シャム宮廷の現状などが記され、第2篇では日本の政治状態、第3篇では日本の宗教及び神社について、第4篇では長崎について記されています。第5篇では、2回に渡る長崎から江戸への江戸参府について記されています。付録は、日本に関する記事から成り、和紙や緑茶の製法、鍼灸による治療法、龍涎香について、また鎖国論について述べられています。

なお、表紙に使われている両開きの絵は都(京都)の清水寺です。

原寸 35.6×22.9cm

『洋書百選』(1972年本学図書館刊行)より抜粋、加筆